

## 未来の利益いまどう代弁?

### ポイント

- 。「フューチャー・デザイン」の研究が急拡大
- 。実験では現在と将来の世代で考え方に差
- 。将来世代のための新制度創設には課題も

が、2組は通常の現在世代グループ、残り2組は「60年の将来世代」の立場になりきる役割を与えられた。

実験の結果、現在世代グループが現在の制約や課題の延長でビジョンを描いたのに対し、将来世代グループは地域の長所を伸ばすためにあえて困難な課題解決を目指すなど、考え方や合意内容に明らかな違いが表れたという。半年後のインタビューで、将来世代グループは「現在世代の自己と将来世代の自己を俯瞰(ふかん)し調停する思考が



う。そのための具体的な制度改革として、将来世代を代表する機関(中央官庁の将来自治体での将来課など)の創設を検討する研究者もいる。

ワークシヨップでは、矢町をほはじめ、長野県松本市、高知県、北海道大沼町などにおける様々な住民討議の社会実験の結果が報告された。いずれにおいても、将来世代の役割を与えられた参加者がいると、討議の結果に変化があらることが確認された。

## 「仮想将来世代」学際で研究

「仮想将来世代」といって、そのように思考することに「喜び」を感じる、と答えたという。西條教授はこのような人格

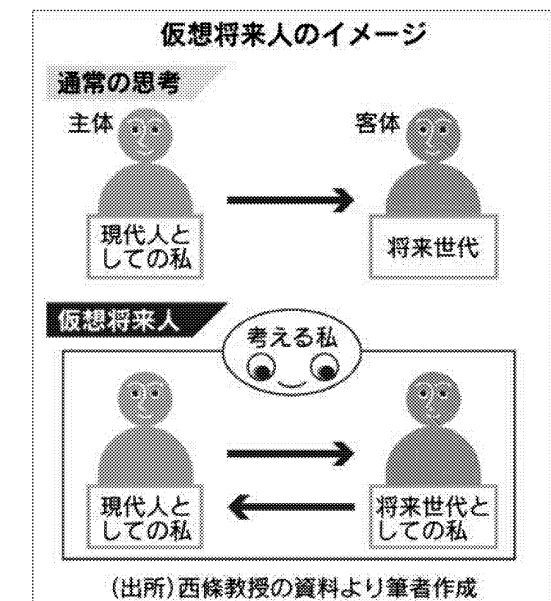
興味深いのは、将来世代の役割を与えられた実験参加者の心理や情動に大きな変化があった、という印象を研究者たちが受けたことである。これは、実験参加者の脳内の活動に何らかの変化が起きている可能性を示唆している。これを把握して、fMRI(機能的磁気共鳴画像装置)による解析で住民討議の場における脳内の変化を計測する研究計画のアイデアも出た。

研究の方向として、筆者は3つの課題を挙げておきたい。

1つ目は、「仮想将来世代(将来省のような公的組織)はどのように機能するか?」。仮想将来世代の組織を作ったときに、それが真に将来世代の利益を代表して現在世代の政策過程をチェックする、なせ言えるのか。

2つ目の課題は、「仮想将来世代の創設(将来省などの新制度の創設)の政治哲学的正当性はどこにあるか?」。将来世代のための新制度を創設するには、そのような改革が現在の民主政のシステムの中でも正当性を持つと言えなければならぬ。

3つ目の課題は、「ふつうの人々が自然に仮想将来人になるにはどうしたらよいか?」。つまり人々が将来世代一般への利他性(「愛」)を高めるにはどうしたらよいかということであり、これはサイエンスを超えた政治思想の問題かもしれない。



2つ目の課題は、「仮想将来世代の創設(将来省などの新制度の創設)の政治哲学的正当性はどこにあるか?」。将来世代のための新制度を創設するには、そのような改革が現在の民主政のシステムの中でも正当性を持つと言えなければならぬ。

3つ目の課題は、「ふつうの人々が自然に仮想将来人になるにはどうしたらよいか?」。つまり人々が将来世代一般への利他性(「愛」)を高めるにはどうしたらよいかということであり、これはサイエンスを超えた政治思想の問題かもしれない。

4人の筆者が交代で執筆、原則、月1回掲載します。

フューチャー・デザインのひとつの目標は「現時点の政治的意思決定の場に、将来世代の利益を代表するアクター(演者)を現出させること」である。原圭史郎・大阪大准教授と西條教授の17年の論文で紹介された実験にその考え

方典型的に表れている。15年、岩手県矢巾町でフューチャー・デザインの研究グループの協力の下、60年までの長期ビジョンを作成することになった。一般市民5、6人のグループ4組で議論して政策案を作るようになった